



日本語における時間表現と過去展望

谷, 冬彦

(Citation)

神戸大学発達科学部研究紀要, 8(2):41-52

(Issue Date)

2001-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000416>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000416>



日本語における時間表現と過去展望

谷 冬彦*

A Study on the Past Time Perspective from the Viewpoint of the Japanese Expression of Time

Fuyuhiko TANI

人は誰も 人生につまづいて
人は誰も 夢やぶれ振り返る

何かを求めて 振り返っても
そこには ただ風が吹いているだけ
(北山 修『風』(注))

問 題 一過去とは何か一

北山(1993)は、精神分析の特徴の一つとして、「過去の観点から理解する」を挙げている。しかし、北山は、「過去の問題」として、後述するSpence(1982)の考えも踏まえて、次のように指摘する。

患者や治療者によって言葉にされた早期幼児期の体験というものは、ほとんどが事が起きてから(事後的に)言葉でとらえ直されたものであり、言葉になったといっても、それは実際に起こったオリジナルの体験そのものではない。言葉にされた幼児期は、個人の歴史的な真実(historical truth)ではなく、個人の物語の上での真実(narrative truth)である、というような考えに立つなら、言語化された体験は実体験とは言語を介して間接的な関係しかもたなくなる。(北山, 1993, p. 203-204)

したがって、ここで「過去」の問題を考える場合には、次の3点を考慮する必要がある。まず、第1点としては、過去の「現実性」の問題である。第2点としては、「物語性」の問題である。第3点としては、「言語化」の問題である。その3点はそれぞれ結びついた問題であるが、以下には、その3点について、順に論ずる。

*神戸大学発達科学部発達基礎論講座

(2000年10月31日 受付)
(2000年11月8日 受理)

1. 現実性

近年の精神分析においては、物語的なアプローチが一つの潮流として注目されている（森岡，1999）。その代表的人物は、SpenceとSchaferであろう。

Spence（1982）は、精神分析的治療において、歴史的眞実（historical truth）を追求することよりも、物語的眞実（narrative truth）の再構成の機会を与えることが重要だということを論じている。つまり、歴史的な事実としての眞実よりも、たとえそれが隠蔽記憶や虚構でしかないとしても、患者本人の物語的眞実こそが本人にとっては最も現実性のあるものであり、精神分析的治療は、分析者－被分析者間で物語的眞実の再構成を目指すものであるとする。

Schafer（1981）は、精神分析における伝統的な現実の考え方（内的現実と外的現実）に対して、「第二の現実」を精神分析の解釈の対象とする。第二の現実とは、分析者と被分析者の共同の事業、共同の体験であり、この第二の現実としての物語を構築することを目標とする。つまり、物語の語り直しが治療の目的になる。そして、語り直しの際には、「行為言語」（action language）を使用することが重要であるとした。

これらのことは、Eriksonの指摘する「現実」に関する論とも、通ずるものがあり、ここでは、Eriksonの観点から、「過去の現実性」の問題を考えたい。

Erikson（1964, 1977, 1982）は、次の三種の現実を指摘している。

○ファクチュアリティ（factuality）

個体発生のいかなる段階もしくは科学と技術のいかなる時代においても、検証可能かつ測定可能なものとして知られるものである（Erikson, 1977）。我々が日常的にいう「もの」的な事実の世界である。それは歪曲や否認などが、ほとんどなく知覚されるとともに、所与の認知発達の段階と、所与の技術と科学の状態において、最も妥当性をもって知覚されるものである（Erikson, 1982）。

○リアリティ（reality）

説得力のある一貫性と秩序を内包し、その一貫性と秩序とは、事実（facts）の本質（nature）を理解できるようにする文脈にまで高めるものである（Erikson, 1982）。「玩具と理性（Toys and reasons）」（Erikson, 1977）の訳者である近藤（1981）の訳語対照表によれば、“エリクソンがここで言うrealityは、われわれが「心的現実」psychical realityと言う時の「現実」、つまり、[物的現実や外的現実にとは合致しない] 幻想でありながら、それを抱く主体にとっては、眞実であり、現実の価値をもつ、という意味での現実である”としている。

○アクチュアリティ（actuality）

「相互活動性」（mutual activation）に基づく現実性を意味する（Erikson, 1964; 1982）。

Erikson（1982）の考えによれば、発達段階の移行にともなう他者との関わりの増大によって、自己の定位感覚（中心性の感覚）が更新される。そして、現実性の感覚というものは、そのような他者との相互作用・相互活動の中で共有され、確証されるのである。このように、相互関係的な様態で存在する現実性を「アクチュアリティ」とした。

この三種の現実の中で、最も重要な側面は、「アクチュアリティ」であろう。

「アクチュアリティ」は、「相互活動性」に基づく現実であり、Schafer（1981）の語り直しの際に「行為言語」を重視する立場における「第二の現実」に非常に近く、Spence（1982）の言う「物語的眞実」にも近いであろう。

日本語における時間表現と過去展望

Erikson (1964) は、「アクチュアリティ」について述べる中で、“精神分析家の仕事は、患者の統合過程が事実として彼らの上のしかかっている過去の断片によって停滞し、これが未来へと変容していかない道筋を一事例ごとに研究することである。—ここでいう過去の断片とは、たとえば消化不良の記憶、満たされざる衝動、軽減できない恐怖、うまくいかない関係、良心の過酷な要求、利用しない持てる能力、不十分な同一性の形成、抑制された精神的な要求などである。”(Erikson, 1964 鐘訳, 1971, p.211) と述べている。

この叙述は、SpenceやSchaferの物語的アプローチに類似している。

さらに、川上 (1989) は、Winnicottの「日常語」にこだわったアプローチを論ずる中で、臨床家にとっては、Eriksonのいう「アクチュアリティ」が最も重要だと指摘し、“エリクソンの眼からすれば、ウィニコットの「日常語」による挑戦は、「相互活動性」に貫かれた「アクチュアリティ」の追求であるといってまちがいない”(p.70) としている。

同様に、日常語から「過去」の問題を考えると、「アクチュアリティとしての過去」としてとらえるべきであろう。「アクチュアリティとしての過去」とは、他者との相互活動を通して獲得された物語的な現実性を持つ過去を意味する。

2. 物語性

SpenceやSchaferが精神分析的立場から、物語的アプローチを主張する一方で、認知心理学的立場からBruner (1994) は、想起された自己の一つの性質として、「物語的な構造を持つ」と指摘する。そして、Bruner (1994) は、自己構成に関する重要な認知的活動は、「記憶」よりも「思考」であると述べている。

Bruner (1986) は、二つの思考様式を指摘している。それは、“paradigmatic thought” と “narrative thought” である。前者は、最終的に、形式的小および経験的な証明をもたらす手続きに訴えることによって真実性を立証しようとする思考様式である。つまり、論理—科学的様式の思考といえる。それに対して、後者は、真理をもたらすものではなく、真実味をもたらすものである。すなわち、その思考においては真実かどうかという検証可能性の必要は全くなく、人の心をひきつけるより良い物語を生成しようとする思考様式である。Bruner (1986) は、その二つは相補的ではあるが、お互いに還元されえず、それぞれは独自のものであるとしている。そして、後者こそが物語に真実味を付与するものであるとしている。したがって、自己物語は、論理—科学的な思考よりも、日常的出来事を物語的に結びつけてゆく物語的思考によって、生成されてゆくのである。

また、Bruner (1994) は、説明を与えられる対話者の機能によって、自己叙述は変化すると指摘する。Bruner (1994) は、想起された自己の“ターニング・ポイント”に注目するが、ターニング・ポイントは、異なった対話者の要求に直面した場合、ジャンル (genre) の中での変化が生ずると考える。つまり、自己物語は、他者との相互作用によって再構成されることを示唆しているのである。

このようなBrunerの考えは、先述したEriksonのアクチュアリティの考えや、SpenceやSchaferの物語的アプローチとの共通性が見られる。

実際、Bruner (1986, 1990, 1994) は、Schafer (1981) とSpence (1982) を引用しながら物語性について論じており、さらにBruner (1994) は、対話者たちの大きな再配役化 (massive recasting) が必要な場合、Erikson (1950) が指摘するようなアイデンティティ・クライシスの脅威にさらされるとし、そのような意味において、Schafer (1981) やSpence (1982) の物語の再構成というアプローチは正しいとしている。

3. 言語化

北山(1995)は、SchaferやSpenceの臨床言語論に影響を受け、次のような分析観を表明している。

幼児期というものには、観察された幼児期や、児童臨床で出会う幼児の幼児期だけでなく、臨床ではそれらと微妙に異なる「語られた過去」としての幼児期というものがある。われわれは、この「語られた過去」を無意識のうちに反復することが多いのであり、分析家は、それを転移分析を通して読み取り、その反復する物語としての台本を言語的にことばにすることを通して、書き直し、語り直しの機会を提供するのであろう。(北山, 1995, p. 320)

また、北山(1993)は、“過去からの転移を解釈する場合でも、過去を解明するよりも、現在のことを過去の体験を比喩化(metaphorization)してとらえなおすと言うほうが実情に即している。”(p. 204)と指摘し、「甘え」を例にとり、次のように説明する。

誰もが、甘えが依存することであり甘いが味覚であることを知っている。この常識的な心理学が精神療法で重要になることは知られているが、この「甘え」の依存心理と味覚という体験とが早期の母子関係のなかでは同じものになりやすいことを意識したり、その水準での問題を分析することは難しいし、その詳細は体が覚えていても言葉で思い出すことは難しい。ところが考えてみるなら、乳児が母親に甘いものを求め、同時に依存していて、甘えているのは実に常識的なことなのである。そのとき、「お母さんに甘えたいけれど、もういないので甘えられない。それで、お母さんの代わりを探しているのですね」と言うとき、現在の人間関係が生き生きととらえられることがある。(北山, 1993, p. 204-205)

北山(1993)は、同一の言葉によって異なった意味が指し示されるという国語的事実を根拠にして、言葉の多義的広がりや有機的結びつきを強調しながら行われる解釈を「国語発想論的解釈」としている。この国語発想論は、FreudやWinnicottを初めとするFreud以後の精神分析家の日常言語を重要視したアプローチを踏襲したものであり、土居健郎の「甘え」理論を受け継ぐ精神分析的日常言語論である。

北山(1993)が述べるように、土居の「甘え」論は、「甘え」という依存心理と「甘い」という味覚の両方を意味するという国語的事実を根拠にして、その二つの意味の間にある有機的な結びつきの存在を仮定した理論なのであり、国語発想論では、それと同様に、「見にくいもの」と「醜いもの」、「溜まらない」と「堪らない」などの言葉にも象徴的連関を想定するのである。

国語発想論は、臨床言語論的な性質を持つが、それとともに、国語発想論的研究の先駆けともいえる土居の「甘え」研究にみられるように、日本文化を考える上でも、重要な視点を与えるものであろう。

過去をとらえるとは、過去を言語化すること、そして物語化することであり、その文化における言語的特質と深く関連する。つまり、日本語で過去を言語化することは、“すでに日本語というシステムに参加する”(北山, 1995, p. 323)ことになるのである。

したがって、日本語における時間表現に着目することによって、日本人特有の過去についてのとらえ方を探究しうるかもしれない。その際、同一の言葉によって異なった意味が指し示されるという国語的事実を重視し、日本語自体が持つ多義的広がりや有機的結びつきを考える「国語発想論」的観点が有効である可能性が考えられる。

4. 本研究の目的

以上のように「過去」の問題を「現実性」、「物語性」、「言語化」という側面から論考した。

これまでの論考を踏まえて日本人の過去展望を考える場合、北山の国語発想論的立場から注目されるのが、日本語の「かえりみる」という表現である。

日本語の「かえりみる」という言葉は、単に過去のことをふりかえる（回顧する）という意味の「顧みる」と、自分の心や言動の善悪についてふりかえて考える（反省する）という意味の「省みる」の2つがあることが注目される。このことは、日本人にとっては、過去をふりかえるということと、自分自身の善悪についてふりかえて考えるということが同義であり、過去をふりかえるということ自体に、自分自身の是非を考えるということが含意されていることを示唆しているのではないだろうか。

このような日本語の時間表現における多義的広がりとは有機的結びつきの構造について検討することによって、日本人の過去のとらえ方の特質の一端を明らかにできる可能性があることが示唆される。

また、谷（1998）は、Erikson理論の立場から、基本的信頼感と時間的展望（特に過去から現在までの時間的連続性）が密接に関連していることを明らかにした。北山（1993）が、過去の体験の再構成を説明する際に「甘え」を例として挙げたように、日本人心性の鍵概念といわれる「甘え」は、基本的信頼感と同様に発達早期という過去の相互行為を源としており、日本人の過去のとらえ方にも関与しているであろうと考えられる。

したがって、本研究では、国語発想論的観点から、過去に関する日本語の時間表現に着目し、調査データの分析を通して、日本人における過去展望の構造・特徴などを検討することを目的とする。その際に、「甘え」との関連性も含めて検討を行う。また、これまでに論じた物語論的な観点、および、国語発想論的な観点から、分析データの解釈および考察を行う。

方 法

1. 調査対象

大学生223名（男：74名，女：149名）。18～26歳（平均年齢19.6歳）。

2. 質問項目

(1) 日常日本語による過去展望質問項目

北山ら（1992）の「日常臨床語辞典」を主に参考にし、「回想」「反省」「後悔」「かたづけ」「つながり」「あせり」「しまいこみ」「回帰」「くりかえし」「あとさき」などの下位概念を設定し、それに対応する項目を収集し、自伝的記憶研究を専門とする大学教官1名との協議の上で、合計61項目を作成した。項目分析の結果、最終的に48項目を採用することにし、これを日常日本語過去展望尺度とした。「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの7段階評定（1～7点）。

(2) 「甘え」尺度

土居（1971）の記述をもとに作成された内田（1998）の尺度を、谷（2000）が再分析し、採用した25項目からなる。「全くない」から「いつもある」までの5段階評定（0～4点）。谷（2000）は、「直接的甘え」、「屈折的甘え」、「とらわれ」の3因子を抽出しているが、本調査におけるデータについて、因子分析を行ったところ、谷（2000）の結果と同一の3因子が抽出され、尺度の構造的安定性が確認された。なお、今回のデータでの α 係数は、「直接的甘え」で.859、「屈折的甘え」で.867、「とらわれ」で.818、「全体尺度」で.902と、谷（2000）の結果と同様な結果であり、内的整合性の観点からの信頼性も確認された。

(3) 過去をふりかえる意味に関する質問項目

Romaniuk & Romaniuk (1981), 長田・長田 (1994) を参考にし, 7項目を作成した。「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの7段階評定 (1~7点)。内容的統一性の観点, および項目分析の結果から, 最終的に, 「過去をふりかえることは、『自分』を見いだすのに役立つと思う」「過去をふりかえることは, これからのことを考えるのに役立つと思う」「過去をふりかえることは, 自分の行動や考えをあらためるのに役立つと思う」の3項目を採用した。以上3項目の α 係数は, .800であり, 高い値を示した。したがって, この3項目の合成得点をもって, 過去をふりかえることの「肯定的意味」とした。

3. 手続き

講義中に質問紙を配布し, 一斉に実施した。調査時期は, 1998年10月であった。

結果

1. 日常日本語過去展望尺度の因子分析

日常日本語過去展望尺度48項目について, 因子分析を行った。固有値の落ち込みから, 4因子が適当だと判断された。Promax回転後の因子パターンを表1に示す。

第1因子は, 「かたづけ」「しまいこみ」「あせり」などの項目から構成されており, 過去を整理できていない状態, 過去を自分の心の中にしまいこんでしまい, 人に語れない状態などに関わる項目から主に構成されているため, 「かたる」における「カタ」も考慮し, 「かたづかない」因子と名づけた。

第2因子は, 「回想」「反省」「後悔」「回帰」「くりかえし」などの項目から構成されているため, 「かえりみる」の語源の「返り-見る」も踏まえて, この因子を「かえりみる」因子と名づけた。

第3因子は, 「あとさき」の項目から構成されており, 第4因子は「つながり」の項目から構成されているため, それぞれを因子名とした。

各下位尺度の α 係数は, 「かたづかない」で .929, 「かえりみる」で .916, 「あとさき」で .811, 「つながり」で .729であった。

因子間相関に着目すると, 「かたづかない」と「かえりみる」の間に .450の相関があり, 過去が「かたづかない」状態においては, 「かえりみる」ことも多く, その一方で, 「かえりみる」ことによって, 「かたづかない」過去の認知を高めるということが示唆されている。また, 「かえりみる」と「あとさき」の間には, .394の相関があり, 「かえりみる」ことと, 「あとさき」を考えることの関連性も示唆されている。さらに, 「かたづかない」と「つながり」の間には, -.316という負の相関があり, 「かたづかない」ほど, 「つながり」を持たないことが示唆されている。

2. 各変数の相関

各変数の相関を表2に示す。まず, 「肯定的意味」は, 「かえりみる」との間に, 値は低いが有意な正の相関がみられる。また, 「つながり」との間には, .414の相関がみられ, つながりを感じているほど, 過去をふりかえることを肯定的にとらえるということが示唆されている。

「直接的甘え」「屈折的甘え」は, 「かたづかない」「かえりみる」と.242~.346の相関がみられる。さらに, 「とらわれ」は, 「かたづかない」と.485, 「かえりみる」と.543と高い相関がみられる。これらのことは, 「かたづかない」「かえりみる」という過去のとらえ方は, 「甘え」と深く関連していることを示唆している。

日本語における時間表現と過去展望

表1 日常日本語過去展望尺度の因子パターン (Promax回転)

項目	F1	F2	F3	F4
第1因子 かたづかない				
35. 過去のことは、話したくない。	.86	-.13	-.08	.00
26. 自分の過去をのぞかれないと感じる。	.82	-.11	-.09	.04
43. 話したくない過去がある。	.79	-.14	-.07	.18
58. 過去のことは思い出したくない。	.77	-.12	-.03	-.10
5. 自分の過去には、ふれられたくない。	.76	-.20	-.04	-.07
45. 過去が重いと感じる。	.73	-.03	.04	.04
39. 過去を整理したい。	.70	.06	.01	-.07
61. 昔のことを思い出すと重苦しい気持ちになる。	.68	.04	.06	-.02
30. 過去のことがらを、精算したい。	.67	.01	.08	.02
16. 過去のことは、自分の心の中にしまっておきたい。	.66	-.06	-.04	-.03
52. 自分の過去が、わりきれない。	.66	.22	-.01	.00
36. 過去の失敗が、身にしみて感じられる。	.55	.24	-.06	.04
20. 過去のことを、吐き出したいと思うときがある。	.53	.03	.08	.18
46. 過去の物事が、かたづいていないと感じる。	.53	.22	-.02	.13
60. 過去のことが、頭からはなれない。	.51	.33	-.01	.02
9. 過ぎ去ったことは、水に流したい。	.50	.02	-.18	.03
42. 過去の失敗は、心にきざみつけられている。	.45	.17	.01	.07
29. 私は過去をひきずっている。	.43	.32	-.00	.07
17. 何かにつけて、あせりを感じる。	.39	.13	.19	-.05
6. 時の流れに、ついてゆけないと感じるときがある。	.36	.18	-.02	.10
第2因子 かえりみる				
15. あの頃の自分にかえりたいと思うことがある。	-.17	.75	-.16	-.11
41. 思い出にひたることが、よくある。	-.14	.72	-.06	.15
55. 過去のことを、よく思い出す。	-.06	.71	.09	.21
4. 昔にかえりたいと感じる。	-.17	.71	-.17	-.19
32. ふと過去を顧みて、思い出にふけることがある。	-.11	.67	-.01	.25
22. 昔の自分を、顧みることが多い。	.09	.61	.06	.16
14. ふとふりかえると、これまでと同じことをくり返しているような気がする。	.09	.60	-.21	-.03
12. 昔のことを、かえすがえす思い出す。	-.01	.58	.22	.01
24. 「また昔と同じことをくり返している」と気づくことがある。	.07	.57	-.19	.03
10. 何かにつけて、後悔する。	.24	.53	.06	-.29
3. 過去をくり返しているような気がする。	.10	.51	-.31	-.07
31. 後になって、悔やむことが多い。	.28	.50	.07	-.08
1. 自分自身の過去をふりかえてみる人が多い。	.07	.48	.15	.23
48. 昔のことを、なつかしく思い出す。	-.15	.48	-.04	.44
33. 自分自身を反省することが多い。	.08	.47	.24	.01
21. 自分のしたことを、悔やむことが多い。	.32	.47	.10	-.19
40. 何をするにも、後々悔やむのではないかと不安になる。	.24	.46	.15	-.21
51. 過ぎ去ったことを、くよくよと考えてしまう。	.23	.45	.17	-.12
11. 自分の行いを、省みることが多い。	.14	.42	.32	.17
25. 幼い頃の自分にかえりたいような気がする。	.06	.40	-.09	-.05
49. 何かをした後、これで良かったのかどうかふりかえることが多い。	.12	.40	.31	-.03
59. あきらめられない過去がある。	.25	.39	-.01	-.05
第3因子 あとさき				
23. 後先をよく考えてから、行動する。	-.10	-.05	.78	.04
13. 後先をよく考えてからではないと何もできない。	.08	-.06	.76	-.11
2. 後先を見ずに、行動してしまう。	.16	.21	-.76	.02
第4因子 つながり				
28. 私の過去は、未来へとつながっていると感じる。	.09	.08	-.07	.69
37. これまでの自分とこれからの自分は、つながっていると感じる。	.20	-.04	-.06	.69
18. 過去の出来事は、自分の身になっていると思う。	-.07	-.06	.12	.60

因子間相関

	F1	F2	F3
F2	.450		
F3	.230	.394	
F4	-.316	-.017	.059

表2 日常日本語過去展望尺度と他の変数との相関

	かたづかない	かえりみる	あとさき	つながり
肯定的意味	-.072	.160*	-.011	.414***
直接的甘え	.261***	.346***	.091	-.065
屈折的甘え	.260***	.242***	.036	.108
とらわれ	.485***	.543***	.176**	-.070

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

考 察

日常日本語過去展望尺度の因子分析結果から4因子が抽出されたが、主な因子は第1因子「かたづかない」と、第2因子「かえりみる」である。したがって、ここではその二つ因子に焦点をあて、国語発想論的な観点から考察をする。また、それらの過去展望と「甘え」との関連についても考察を加える。

1. 「かたづかない」について

日常日本語過去展望尺度の第1因子である「かたづかない」を解釈すると、過去の出来事がかたづいてなく、物語としての筋が通っていないために、他者に過去を語れない状態を示すものであると言える。

妙木(1992)は、「片付く」は「整理がきちんとなされる」という意味であるが、そこから「解決する」「終わる」という意味を含むとし、たえず「片付けたい」と思っている心性を、異常心理の視点からみれば、強迫と呼ぶことができるとしている。

妙木(1992)の論をもとに、第1因子「かたづかない」を解釈するならば、過去の問題が整理されておらず、解決されても、終わってもいない、そして、たえず「片付けたい」という強迫性がそこにはあるという心性を示すものになろう。第1因子の項目に着目すると、過去について「整理したい」「精算したい」「わりきれない」「かたづいていない」「頭からはなれない」「水に流したい」「ひきずっている」などが、その心性を表すものであろう。

また、渡辺(1992)によれば、「かたる」のカタはカタドルのカタと同源であり、出来事を模写して、その一部始終を聞かせるのが原義である。そして、起承転結をもったひとまとまりの発語行為ないし発話行為を意味する点で、「語る」は「話す」と共通の性格を持つとともに、「語る」は「形一る」「形どる」であり、統合、反省などの加工を施されていて、表現の中に創造的側面を盛り込んでいることが暗示されている。またこの創造的・生産的行為は、なんらかの「安心」を前提としていて、「語り」「語られる」場は他者との親和的、共存的雰囲気を帯びている。またこの場は、過去・現在・未来といった時間を越えた「いま」によって支配されている。このようにして成立した「語り」の行き着く場は「ものがたり」であると、渡辺は述べている。

渡辺(1992)は、「かたる」は「形一る」であることを指摘しているが、「かたづかない」状態においては、人に語るだけの「カタ」ができてなく、物語にもならない。また、「語り」「語られる」場における「安心」が得られていないと考えられる。それゆえ、その心性は、第1因子の項目の中の「話したくない」「のぞかれたくない」「ふれられたくない」「しまっておきたい」などの項目に反映して

いるであろう。

さらに、北山(1993)は、物語発生過程の一つとして「カタが生まれる」を挙げており、“どのようなコトのあり方、言い方、やり方、関わり方にも、繰り返しがあるとそのカタは決まってくる。カタが未熟な段階では、その顛末に筋は通らないし、通す必要もないし、断片的な言動の理屈や理にかなうための合理性、整合性は棚上げされる。また、カタは決まっても、また見えなくなる。嵐がおさまるのを待たねばならない。”(p.185-186)と述べている。

北山(1993)が述べているような物語が発生する以前のカタが未熟で混乱している状態の心性は、第1因子の項目全般に反映されたものと考えられるかもしれない。

ここで、「かたづかない」の統計的分析データに着目するならば、内的整合性を示す α 係数も、.929と非常に高く、全体が構成概念としてある一貫性をもっていることを示している。

2. 「かえりみる」について

第2因子は「かえりみる」と名づけられたが、当初の予測通り、二つの「かえりみる」、すなわち「回想」(顧みる)と「反省」(省みる)は同一因子として抽出された。したがって、この結果から、日本人にとっては、過去をふりかえるということ自体の中に、自分自身の行いの是非を考えるということが含意されていることが示唆された。

しかしながら、それ以外にも、「後悔」「回帰」「くりかえし」などの項目が第2因子には含まれている。

先述したように、「かえりみる」の語源は、「返り-見る」にあり、それを踏まえて国語発想論的に視野を広げれば、同源言語として、「かえる」は「返る」の他にも、「帰る」「還る」などが挙げられる。

そう考えるならば、「後悔」は、過去を「返り-見る」ことによって悔やむことを意味し、「回帰」は「帰る」「還る」ことであるし、「くりかえし」もまた、「返り-見」て、その反復を「省みる」ことを意味している。

したがって、この「かえりみる」という因子は、国語発想論的に解釈を加えるならば、「回想」「反省」「後悔」「回帰」「くりかえし」などの多義的広がりを持ちながらも、それらがすべて「かえりみる」という言葉において、有機的結びつきを持った構成概念と考え得るかもしれない。

この「かえりみる」という下位尺度においても、 α 係数に着目するならば、.916と非常に値が高く、多義的な内容を含みながらも、高い一貫性を持った構成概念であることが示唆されている。

3. 過去展望と「甘え」

「かたづかない」および「かえりみる」と、「甘え」尺度における3つの下位尺度である「直接的甘え」「屈折的甘え」「とらわれ」との間にはいずれも有意な相関がみられた。このことから、「かたづかない」、「かえりみる」といった過去展望は、「甘え」と関連することが示唆された。

「かたづかない」状態においては、人に語るだけの「カタ」ができてなく、また、「語り」「語られる」場における「安心」が得られていないということを指摘したが、そのような「かたづかない」過去を他者に受け入れて欲しい、そして、語る場の安心を得たいという「甘え」欲求が存在しているものと解釈できるかもしれない。

また、「かえりみる」という過去展望の中には、単に過去をふりかえる「回想」とともに、「反省」「後悔」「回帰」「くりかえし」などの内容もみられた。「反省」と「後悔」はともに、自らの過去の行いについて非をさとることであるものの、反省や後悔の念を抱きながらも、多くの場合は自らの非を全面的には受けとめることができず、すでに取り返しつかないことでありながらそれを見逃して

ほしい、そして、できることならばもう一度やり直したいという「甘え」感情が起こると解釈できるであろう。そう考えるならば、「くりかえし」も自らの反復を「省みる」ことであり、過去の反復の無益さを否定し、自分の非を認めたくないという「甘え」願望と結びつくものとして、同様に考えられ得る。また、「回帰」についても、類似の視点から解釈しうる。すなわち、「回帰」は、「昔に戻りたい」という回帰願望を示しているものの、現実には時間軸上で回帰することは不可能なのであり、そのような非現実的願望は、現実と直面することを避け、幻想的世界に逃げ込もうとしているという意味で、「甘え」と関連していると捉えうるのである。特に、項目25における「幼い頃の自分にかえりたい」願望は、甘えられていた幼い子ども時代への回帰願望を表しており、最も良く、そのような「甘え」との関連を示している。

さて、「かたづかない」と「かえりみる」は、ともに「とらわれ」との相関が高いという結果が出ており、「甘え」の中でも、特に「とらわれ」との関連が強いことが示唆されている。

土居(1994)は、「とらわれ」とは「甘えたくとも甘えられない心」の現れだとしている。また、Johnson(1993)は、土居の定義を踏まえて、「とらわれ」を『「甘える」ことが拒絶されるのを恐れて、同じことをくり返し考えたり』することと定義している。

「かたづかない」にしても「かえりみる」にしても、過去に「とらわれ」ている状態であり、それは、「甘え」欲求を持ちながらも、それが満たされないことと深く関連していると解釈しうるかもしれない。

過去が「かたづかない」状態とは、「甘えたかったのに甘えられなかった何らかの経験」にこだわってしまっているがゆえに、過去に「とらわれ」てしまっており、過去が物語としての一貫性を持ってない状態を示すのかもしれない。

そして、「かえりみる」ことは、「反省」や「後悔」、そして自らの「くりかえし」を省みることのように、自分の非を認知するといった「甘えたくとも甘えられない」現実への直面化を含むものであり、それゆえに、「甘えたくとも甘えられない心」としての「とらわれ」の状態と関連すると理解できるであろう。また、「回帰」は、過去に戻るといふ現実的には不可能な願望を示しており、幼い頃のような「甘えられていた過去」への回帰願望として捉えるならば、こちらの方がより直接的に「甘えたくとも甘えられない心」としての「とらわれ」の状態をよくあらわしているといえる。

このように、過去展望という時間的次元の統合が、「甘え」という対人関係性の次元と関わっているという結果は、様々な意味で示唆的である。

対人的な相互作用によって、自己物語が構成されることは、先述した物語論的立場において論じられていることであり、また、対人関係性における感覚の次元と時間的連続性の次元は、関連し合っていることは、すでに、谷(1998)の基本的信頼感と時間的展望の研究結果によって示されているが、本研究の結果はそれらに一致するものであるとともに、それに加えて、日本人の過去展望の在り方の特質をも示唆している。

われわれは、過去という時間的つながりを、「甘え」という対人的つながりとの関連において、自己の物語を構成してゆくかもしれない。

本論文の冒頭の北山の詩について、北山自身は次のように語る。

この「風」も振り返っても風が吹いているだけ、何もないと言いながら振り返っているわけですが、振り返ったらまだそこに誰かいてくれるのではないかという期待は、まだまだ未練があって、そのふっきれていない気持ちに酔いすぎているのだという傾向を感じます。(北山, 1981)

つまりこの詩は、人生という時間軸の中で過去を振り返ることの「甘え」と、振り返ったら誰かがいってくれるのではないかという対人的次元の「甘え」との関連性を暗示しているのである。そして、「振り返っても風が吹いているだけ」としながらも、「振り返ってしまう未練、ふっきれていない気持ち」という、アンビバレントな感情を表現する。それは、あたかも、過去を振り返っても仕方がないとわかっていながらも振り返ってしまうことを、背後にはもう母親がいないことがわかっていながらも振り返ってしまう子どもの様相に擬しているようにも思える。

4. まとめと今後の課題

本研究においては、日本語における時間表現に着目し、過去展望について検討したが、日本語によって過去を言語化し、物語化することには、日本人心性の鍵概念ともいわれる「甘え」が関連しているということが示唆された。すなわち、日本人においては、「甘え」という対人的つながりの様相が、過去の時間的つながりの統合と関連し合っているという、日本人の過去の言語化・物語化の特質の一端を、本研究は示唆した。

本研究は、日本人の過去展望の特徴に関して検討したものであるとともに、主に精神分析的言語論である国語発想論の見地から検討したものであり、臨床言語論および日本語臨床における基礎資料の提示という意義もあろう。

本研究では、日本人の過去の言語化・物語化の特質の一端を示唆し、臨床言語論および日本語臨床における基礎資料の提示するにとどまったが、今後、本研究を発展させ、日本文化における言語化と物語化といった、自己物語統合の日本文化的特質というものをより明らかにするとともに、臨床言語論、日本語臨床への応用的研究も必要とされるであろう。

(注)『風』は、次のCDに収録されている。

○「キタヤマ・オ・サム／北山修青春詞歌集」(東芝EMI/TOCT-8847/1995年)

なお、上記CDのオリジナルは、1981年に発売されたアナログ盤である。

引用文献

- Bruner, J.S. 1986 *Actual minds, possible worlds*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. (田中一彦(訳) 1998 可能世界の心理 みすず書房)
- Bruner, J.S. 1990 *Acts of meaning*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. (岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子(訳) 1999 意味の復権 ミネルヴァ書房)
- Bruner, J.S. 1994 The "remembered" self. In U. Neisser & R. Fivush (Eds.), *The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp.41-54.
- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- 土居健郎 1994 日常語の精神医学 医学書院
- Erikson, E.H. 1950 *Childhood and society*. New York: W.W. Norton & Company.
- Erikson, E.H. 1964 *Insight and responsibility*. New York: W.W. Norton & Company. (鏑幹八郎(訳) 1971 洞察と責任 誠信書房)
- Erikson, E.H. 1977 *Toys and reasons*. New York: W.W. Norton & Company. (近藤邦夫(訳) 1981 洞察と責任 みすず書房)
- Erikson, E.H. 1982 *The life cycle completed*. New York: W.W. Norton & Company. (村瀬孝雄・近藤邦夫(訳) 1989 ライフサイクル, その完結 みすず書房)

- Johnson, F.A. 1993 *Dependency and Japanese socialization: Psychoanalytic and anthropological investigation into AMAE*. New York: New York University Press. (江口重幸・五木田紳(共訳) 1997 「甘え」と依存—精神分析的・人類学的研究— 弘文堂)
- 川上範夫 1989 ウィニコットの「日常語」を学ぶ 北山 修・妙木浩之(編) 現代のエスプリ 言葉と精神療法 至文堂 Pp.67-83.
- 北山 修 1981 北山修青春詞歌集 ライナーノーツ 東芝EMI
- 北山 修(編) 1992 ことばの心理学 日常臨床語辞典 イマーゴ増刊, 3, 青土社
- 北山 修 1993 言葉の橋渡し機能—およびその壁 岩崎学術出版
- 北山 修 1995 日本語臨床と精神分析 小此木敬吾・妙木浩之(編) 現代のエスプリ別冊 精神分析の現在 至文堂 Pp.314-324.
- 森岡正芳 1999 精神分析と物語(ナラティブ) 小森康永・野口裕二・野村直樹(編著) ナラティブ・セラピーの世界 日本評論社 Pp.75-92.
- 妙木浩之 1992 かたづける イマーゴ増刊, 3, 104-105.
- 長田由紀子・長田久雄 1994 高齢者の回想と適応に関する研究 発達心理学研究, 5, 1-10.
- Romaniuk, M., & Romaniuk, J.G. 1981 Looking back: An analysis of reminiscence functions and triggers. *Experimental Aging Research*, 7, 477-489.
- Schafer, R. 1981 Narration in the psychoanalytic dialogue. In W.J.T.Mitchell(Ed.), *On narrative*. Chicago: University of Chicago Press. (海老根宏他(訳) 1987 精神分析の対話における語りミッチェル(編) 物語について 平凡社 Pp.51-87.)
- Spence, D.P. 1982 *Narrative truth and historical truth*. New York: W.W. Norton & Company.
- 谷 冬彦 1998 青年期における基本的信頼感と時間的展望 発達心理学研究, 9, 35-44.
- 谷 冬彦 2000 青年期における「甘え」の構造 相模女子大学紀要, 63A, 1-8.
- 内田亜紀子 1998 大学生の「気がね」に関する研究 群馬大学教育実践研究, 15, 271-284.
- 渡辺智英夫 1992 かたる イマーゴ増刊, 3, 106-107.

付 記

本研究は、日本発達心理学会第10回大会、第6回日本語臨床研究会、'99年度臨床言語研究会などで発表された内容を論文としてまとめたものである。

臨床言語研究会におきまして、大変貴重なご教示をいただきました九州大学大学院人間環境学研究所 北山 修 先生に深く感謝致します。

また、質問項目作成にあたりまして、ご協力いただきました群馬大学教育学部 佐藤浩一先生に心より御礼申し上げます。